

公開講座「神奈川の海を学ぶ」講義要旨

第1回 10月15日(水) 18時~20時

講義タイトル：世界と日本の海洋史

講師：中原裕幸（横浜国立大学 統合的海洋教育・研究センター 客員教授）

要旨：人類は古代から現代に至るまで、海をどのように認識し、また管理しようとしてきたかについて学ぶ。ローマ時代の海（地中海世界）の認識、中国およびヨーロッパにおける大航海時代、スペイン・ポルトガル、次いでオランダ・イギリスによる世界の海洋分割の時代、国際海洋法の形成過程と戦後の国連海洋法条約（UNCLOS）の成立過程、そして今日の200海里問題までの流れを把握する。さらに、日本の明治維新時代の海洋管理、1990年代のUNCLOS批准、EEZ設定、今世紀に入ってから海洋基本法・基本計画、そして現在がどういう位置にあるか等を客観視して理解する。

第2回 10月29日(水) 18時~20時

講義タイトル：相模湾の成り立ちと地震

講師：藤岡換太郎（神奈川大学 非常勤講師、元海洋研究開発機構 特任上席研究員）

要旨：日本の三大深海湾である相模湾は富山湾、駿河湾と共に水深2,000mを越え、沈み込むプレートの境界が湾内を通る。駿河湾と相模湾は今から100万年ほど前に形成され生物多様性に富む。なぜ相模湾に生物が多様なのかは、沈み込むプレート境界、浅海から深海まで、火山、断層、暖流と寒流、河川水があること、地下からの湧水などの条件があるためである。相模湾の生物はかつてフォッサマグナを伝って日本海につながっており富山湾の生物群集と共通する可能性がある。この地域は今から2,000万年前から日本の南下、日本海の拡大、フォッサマグナの形成、伊豆・小笠原弧の衝突・付加によってできた。相模湾はプレート境界にあるために巨大地震がしばしば起こっている。

第3回 11月12日(水) 18時~20時

講義タイトル環境に優しい漁業：サバの未来と東京五輪

講師：松田裕之（横浜国立大学 統合的海洋教育・研究センター 教授）

要旨：伊豆諸島周辺を主産卵場とするマサバは、1990年ころに激減した。その後、92年と96年に「卓越年級群」が出現したが、多獲されて資源回復には繋がらなかった。このころから、漁業者も資源管理の必要性を認識するようになった。近年、規制改革や水産庁の「資源管理のあり方検討会」などで、日本の漁業制度改革を求める声が高まっている。他方、ウナギのように資源が枯渇し、回復の展望さえたない魚もある。リオ五輪では、全水産物をMSC（海洋管理協議会）国際認証にする予定という。日本国内でMSC認証をとった資源はごくわずかであり、輸入品を扱う小売店もまだ少ない。東京五輪ではどうするか。世界有数の水産物消費国として、環境にやさしい漁業のあり方を考える。

第4回 11月26日(水) 18時~20時

講義タイトル：港町の賑わい

講師：宮本卓次郎（横浜国立大学 統合的海洋教育・研究センター 教授）

要旨：本講義は、「港町の賑わい」として、特に人と港湾との関わりを通じた港湾都市の課題と展望について概説する。かつての港町は多くの人で溢れていた。しかし、船舶が大型化したこと、臨海

部を工場で埋まったこと、物流の機械化、省力化が進んだことなどによって、港湾は人々の賑わいからは遠い存在になってしまった。一方、港湾にも人々の賑わいを取り戻すためにMM21に代表される臨海部の再開発が進められ、国際クルーズを受け入れるための港づくりが課題となっている。港町の歴史があつて発展した港湾都市にとって、発展の礎であった港湾の今後は重要である。本講義を通して、多くの市民が港湾への理解を深めることを望む。

第5回 12月10日(水) 18時~20時

講義タイトル：神奈川の海を知る

講師：水井涼太（横浜国立大学 統合的海洋教育・研究センター 講師）

要旨：神奈川県には、港町である横浜や横須賀、三崎などに加え、葉山、逗子、鎌倉、湘南・西湘が広がり、海辺の文化やライフスタイル、マリンスポーツなど、海との関わりが非常に強い地域です。また、昨今は津波防災や海岸の砂の流失など様々な問題や課題が大きく取り上げられ、人々の関心を集めています。一方で、神奈川にとって「海」はアイデンティティーと呼べるほどのものでありながら、海の生物や生態系、環境や水中の景観などは、陸上の里山とは異なり、あまり一般市民に知られていません。海の生物や生態系については、学校の教育カリキュラムにも含まれず、学術的に知る機会もあまりありません。今回は、そんな神奈川の海の自然について講義するとともに、その必要性や海の自然を活かした地域活性化などについてご紹介します。